九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

＜研究ノート＞ 用語用例辞典における見出し語の抽出について ： 社会開発分野のテキストに基づく試み

恒川, 元行
九州大学大学院言語文化研究院言語科学部門・言語情報学

https://doi.org/10.15017/6796441

出版情報：言語科学. 39, pp.155-166, 2004-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

＜研究ノート＞　用語用例辞典における見出し語の抽出について
－社会開発分野のテキストに基づく試み－

恒川元行

1．はじめに：本稿の目的

本稿は、国連の社会開発サミット（1995 年 3 月、コペンハーゲン）で採択された"Copenhagen Declaration on Social Development and Programme of Action of the World Summit for Social Development"（以下「宣言」）の英文テキストをもとにして、この「宣言」に出てくる主要語彙の用語用例辞典を作成する手順、特にどの語を見出し語として立てるかに関する考察である。

このような用語用例辞典の作成やその手順に関する考察は、本稿で直接の対象としている社会開発分野の語彙に限らず、どの分野のものであれ、その分野での基本的語彙を知り、その語彙を用例と共に実践的に学習することができるように準備するために、欠かすことのできない基礎的作業である。特に、社会開発のような新しい活動領域・学問分野では、実践が先行し、それに伴って多数の文書が作成されているが、まだ専門辞書も整備されておらず、本稿が念頭においているような表現例を付した用語集の必要性は高いと思われる。

他方、あるテキストをもとにその分野の基本的語彙を抜き出し、その用例を示すことは、一見、簡単なことであるように思われるが、実際に作業を始めてみると困難を覚えることが多い。たとえば、出現頻度を調査すれば基本語彙を確定することができそうであるが、高頻度の語彙は基本的に他のテキストにも高頻度で出現するような一般的語彙（冠詞、代名詞、前置詞などの機能語）であることが多く、その分野を特徴付ける語彙の多くはそれ以外の、むしろ低頻度の語彙に含まれている。したがって、頻度基準は有効な手立てとはなりえず、そのほかの作業手順を検討することが必要である。

本稿は、そのような作業手順として、実際の文を構成する複雑な諸要素の絡まりを基本的に 2 要素間の関係に整理し、その 2 要素間の関係に基づいて見出し語を立て、語彙を整理するという方法を考えている。その土台となる方法論は、一般的なコロケーション理論における方法論である。以下では、まず、Hausmann(1985)のコロケーション理論に基づいて、基礎語（Basis）と修飾要素（Kollokator）の区別、受容辞書（Rezeptionswörterbuch）と生産辞書（Produktionswörterbuch）の区別、また狭義の「コロケーション」の範囲を越えて 2 要素関係に基礎語と修飾要素の区別を当てはめる際に、密接に関わると思われるコロケーション・ポテンシャル（Kollokationspotential）という概念に触れ、その後、上記「宣言」の具体的な文例に基づいて見出し語抽出の作業手順を検討する。

なお、本稿は、このような作業手順をすべて検討し終わった後の完了報告ではなく、試

Linguistic Science, No.39 (2004), pp.155－166

行錯誤の過程での現時点での成果をまとめた、予備的な考察である。

2．コロケーション理論における考え方

2．1　基礎語と修飾要素の区別

Hausmann(1985)では、コロケーション理論の主要な課題として、第一に、ソシュールの二分法による langue の方に属する「固有的、典型的な 2 要素結合」としてのコロケーションを、parole に分類される単なる平凡な 2 要素結合から区別することが挙げられている（118f.)。これと並び、コロケーションを構成する 2 つの結合要素に関して、「相互の地位」を記述することが第 2 の主要課題であり、コロケーション・パートナーが「相互に対して階層的に順序付けられているということが重要である」と述べられている（119)。

すなわち、2 つの語が結合してコロケーションをなす場合、これらの要素はまったく対等な関係にあるのではなく、「パートナーの一方が決定し、他方が決定される関係」(119) をなしているということである。Hausmann(1985) は、このうち前者を「修飾要素（Kollokator)」、後者を「基礎語（Basis)」と呼んでいる。

この関係は、具体的には、以下のように説明される（119)：

schütteres Haar「薄くなった髪の毛」　→基礎語 Haar＋修飾要素 schütter
Geld abheben「お金を下ろす」　→基礎語 Geld＋修飾要素 abheben
verbissen kämpfen「必死に戦う」　→基礎語 kämpfen＋修飾要素 verbissen
ein Schwall von Worten「滔々たる熱弁」　→基礎語 Worte＋修飾要素 Schwall

このような基礎語と修飾要素の階層は、たとえば文章を書く、というようなテキスト生産の場面を思い浮かべる場合に了解されるような階層である。つまり、ある人が Haar「髪」について文を書こうとする場合、当然のことながら Haar がまず念頭にあり、それに適切な形容詞、たとえば schütter「薄くなった」を付け加えるという順を経ることがふつうである。この逆に、「形容詞 schütter が眼前にあって、それに対し、たとえば基礎語の Haar が思い浮かばないという状況は想像することができない」(119)。このように、テキストを生産する場合、2 つの要素は対等ではなく、基礎語から修飾要素へ進展するという階層構造をなしている。

Hausmann(1985)は、さらに、基礎語として最も重要な品詞は名詞であることを述べている。このことは、先述したような、低頻度語彙にそのテキストを特徴付ける語が多いことの理由でもあるが、それは「それについて何か言うべきことが存在するところの、この世界の事物や現象を表現するのは名詞であるからである」(119)。この理由から、基礎語はふつう名詞であり、形容詞と動詞が基礎語として機能するのは、それが副詞によってさらに規定を受ける場合のみであると述べられている（119)。

2．2　受容辞書と生産辞書の区別

前節で触れた基礎語と修飾要素の区別は、それ自体としては、まだ単なる区別にすぎない。この区別は、しかし、辞書編纂の実際において、コロケーションは基礎語の項目に記載すべきか、修飾要素の項目であるべきかという実践的問題と関連すると、きわめて重要な意味を持つことになる。

すなわち、schütteres Haar「薄くなった髪の毛」、Geld abheben「お金を下ろす」、verbissen kämpfen「必死に戦う」、ein Schwall von Worten「滔々たる熱弁」のようなコロケーションは、それぞれ基礎語（Haar, Geld, kämpfen, Worte）の項目に記載すべきか、修飾要素（schütter, abheben, verbissen, Schwall）の項目かという問題である。

もちろん、それぞれ両方の項目に記載が可能であるならば、当然、それに越したことはない。しかし、辞書編纂の実際においてはスペース上の制約が必ず存在し、いずれかを選択しなければならないことがふつうである。それでは、コロケーションは、基礎語、修飾要素のどちらに記載されればよいのだろうか。

この問題の解決は、Hausmann(1985:121f.)によれば、機能の観点からの辞書の区別、すなわち受容辞書（Rezeptionswörterbuch）と生産辞書（Produktionswörterbuch）の区別と関連している。すなわち、辞書編纂の実際においてスペース上の制約がある以上、辞書の機能を明確に規定し、その観点から記載場所を、それぞれ意味のあるいずれか一方に徹底すべきであるという結論が得られる。

まず、ある与えられたコロケーションを理解する場合、つまり受容辞書の場合を考えるならば、そのコロケーションは、修飾要素の項目に記載することが便利である。これは、schütteres Haar のような表現が与えられており、その意味が未知である場合、私たちにとって、辞書のどちらの項目にこのコロケーションの記載があればより便利であるかを思い浮かべてみるならば、明らかであろう。つまり、一般的に、Haar のような基礎語の方が意味的に幅広く、それゆえ記述が相対的に大きくなり、記述全体が見渡しにくくなる。これに対し、schütter のような基礎語の意味を限定する修飾要素は、その機能上意味が狭く、それゆえ記述が相対的に小さく、見渡しやすい。したがって、修飾要素のほうに記載があることが、使い勝手のよさとつながることになる。

この条件下での修飾要素の項目への記載は、しかしまた、「schütteres Haar の形容詞 schütter を、私は Haar との関連なしに定義することができない。Unfall bauen の動詞 bauen は、コロケーション Unfall bauen に立ち戻ることなく定義することはできない」（121f.）という定義上の必要性を考えるならば、不可避でもある。

これとは逆に、何らかのテキストを生産しようとする場合、すなわち生産辞書の場合を考えるならば、修飾要素の項目にコロケーションを記載することは無意味である。なぜならば、すでに 2.1 節で触れたように、ある人がたとえば Haar について述べようとする場合、基礎語（Haar）がまず念頭にあり、この基礎語に対しそれを修飾する適切な表現（た

とえば schütter）を探すという順序を経るのであり、その逆ではないからである。したがって、辞書がテキスト生産の助けとなることを目指して編纂されるのであれば、コロケーションは、基礎語の項目に記載されなければならないことになる。

以上を踏まえて基礎語を再定義するならば、基礎語とは、「何か内容のある文を書くなど、テキスト生産の場合に、キーワードとしてまず念頭にある語で、それに各種の修飾要素が付加される語」と定義することができる。

2．3　コロケーション・ポテンシャル

ここではさらに、本稿が意図しているような用語用例辞典の見出し語を抽出する際、すなわち狭義の「コロケーション」の範囲を越えて 2 要素関係に基礎語と修飾要素の区別を当てはめる際、重要な役割を果たすと思われる概念として、「コロケーション・ポテンシャル（Kollokationspotential、英 collocational range)」(124) に触れておく必要があるだろう。

この概念は、2 要素が結合をなす場合に、それぞれの要素がパートナーとして結合する可能性のある要素の集合の大小を表すものである。再び、Hausmann(1985:124)の例によるならば、schütter のコロケーション・ポテンシャルはきわめて小さく限定されている。なぜならば、この形容詞はほとんど Haar としか結合せず、その定義自体に Haar が不可欠であるほど関係が固定しているからである。これに対し、基礎語の Haar は、schütter だけでなく、kurz や lang など、他の形容詞とも幅広く結合する可能性を持っており、この意味でそのポテンシャルは相対的に大きいと言える。

3．具体例の検討

さて、本章は、上記「宣言」の「第 2 部 行動計画（Annex II:PROGRAMME OF ACTION OF THE WORLD SUMMIT FOR SOCIAL DEVELOPMENT)」の「前文（INTRODUCTION)」から取った第 2 節および第 3 節のテキストをもとに、具体的に見出し語の抽出について考察した結果をまとめたものである。

コロケーション研究で扱われているような固有な 2 要素結合が、すでに抽象・整理された一重の関係であるのに対し、このような実際の文に含まれる要素間の結合関係は、二重、三重に重なり合い複雑であることがふつうである。

the exercise of all human rights and fundamental freedoms
すべての人権および基本的自由の享受

たとえば、この例では、まず「形容詞＋名詞」結合である human rights、fundamental freedoms があり、それがさらにもう一つの「名詞＋名詞」結合 the exercise of all human rights、the exercise of all fundamental freedoms へと複合している。

この例に、狭義のコロケーションの枠を超えて、第 2 章で見た基礎語・修飾要素の区別を応用する場合、Hausmann(1985:119)に基づけば、前者の「形容詞＋名詞」結合では名詞（rights、freedoms）が基礎語、形容詞（human、fundamental）が修飾要素と分析されるだろう。また、後者の「名詞＋名詞」結合では、目的語に相当する名詞（rights、freedoms）が基礎語であり、動詞に対応する名詞（exercise）が修飾要素である。これは、この名詞句が、to exercise all human rights and fundamental freedoms と、「動詞＋名詞」の関係にパラフレーズできることを根拠としている。したがって、この例に関して言えば、用語用例辞典の見出し語としては、いずれの場合も、rights、freedoms を立てればよいということになる。

しかし、実際の関係は、このような比較的わかりやすい例ばかりではない。以下では、上記の 2 節に含まれる 2 要素関係を基本的にすべて取り出し、試みとして 9 とおりに整理しておく。これによって、「宣言」のその他の部分に含まれる複雑な要素間関係も、すべて問題なく解きほぐして整理でき、見出し語が抽出できるかどうかは、しかし、今後の作業の進展を待たなければならない。

3．1　動詞＋名詞（目的語）→ 見出し語＝名詞（目的語）

タイプ 3.1 の諸例は、「動詞＋名詞」の結合である。動詞は他動詞であり、名詞はこの他動詞の目的語に相当する要素である。基礎語・修飾要素の区別に従えば、目的語名詞が基礎語であり、他動詞が修飾要素である。これらの例では、すべて、目的語名詞を見出し語として立てればよいことになる。（以下、実線による下線部が基礎語、すなわち見出し語であり、点線による下線部が修飾要素である。）

to take *action* in accordance with its evolving capacities その発展能力に応じて行動をとる
to combine many different *actions* 多くの異なる行動を結びつける
to link all the recommended *actions* 勧告されるすべての行動を相互に関連させる
to recommend *actions* 行動を勧告する
to take into account the *commitments, principles and recommendations* of these other conferences これらの他の会議のコミットメント、原則及び勧告を考慮する
to eliminate *discrimination* 差別を撤廃する
to reduce *disparities* 不均衡を減少させる
to enhance productive *employment* 生産的雇用を拡大する
to enhance positive *interaction* between environmental, economic and social policies 環境、経済及び社会の各政策間の前向きな相互の関係を強化する

to take into account the *outcomes* of relevant international conferences 関連の国際会議の成果を考慮する
to promote *participation* 参加を促進する
to eradicate *poverty* 貧困を撲滅する
to elaborate the *Programme of Action* against the background of these other conferences 行動計画をこれらの他の会議を背景としつつ作成する
to combat *social exclusion* 社会からの疎外を防ぐ
to foster *social integration* 社会的統合を強化する
to promote *social objectives* in the context of their particular conditions それぞれの特別な状況のコンテキストにおいて社会目的を促進する
to promote harmonious *social relationships* among groups and nations グループと国家間の調和ある社会関係を促進する
to reduce *unemployment* 失業を減少する

しかし、このタイプには、目的語名詞のポテンシャル（2.3 節参照）が極めて大きいため、これを見出しとして立てることに意義の認めにくい以下のような結合も含まれている。しかし、両者の間に機械的に境界線を引くことは難しく、個別的に判断することが必要であろう。

to require *access* to the provision of good education, health care and other basic public services 良質な教育、ヘルスケア及びその他の基礎的な公共サービスへのアクセスが必要である
to require the *development* of harmonious relations within communities コミュニティー内の調和ある関係の発展が必要である
to require the *exercise* of all human rights and fundamental freedoms すべての人権及び基本的自由の享受が必要である

3．2　動詞の名詞化＋前置詞 of＋名詞（目的語）　→ 見出し語＝名詞（目的語）

本節のタイプ 3.2 は、基本的にタイプ 3.1 と同じであるが、動詞が名詞化され、目的語相当の名詞とは前置詞 of によって結ばれている点で 3.1 とは異なっている。すでに第 3 章冒頭で触れたように、この動詞の名詞化タイプは、対応する動詞句にパラフレーズ可能である（the *exercise* of all human rights and fundamental freedoms →to *exercise* all human rights and fundamental freedoms）ことに基づき、基礎語･修飾要素の関係を考えることができる。

the provision of good *education* 良質な教育の提供

the creation of *employment opportunities* 雇用機会の創出
the exercise of all *fundamental freedoms* すべての基本的自由の享受
the provision of *health care* ヘルスケアの提供
the exercise of all *human rights* すべての人権の享受
the implementation of the present *Programme of Action* 本行動計画の履行
the provision of other basic *public services* その他の基礎的な公共サービスの提供
the implementation of the *recommendations* contained in the Programme of Action 行動計画に記載されている勧告の実施
the development of harmonious *relations* within communities コミュニティー内の調和ある関係の発展
the full involvement of both *the State and civil society* 国家と市民社会双方の完全な関与
the protection of *the weak* 弱者の保護

3．3　名詞（目的語）＋動詞の名詞化　→　見出し語＝名詞（目的語）

タイプ3.3は、3.2のような前置詞ofによる分析的な構成ではなく、「目的語相当の名詞＋他動詞の名詞化」という並列構造を持っているものである。構造こそ違え、このタイプもまた対応する動詞句にパラフレーズ可能である（poverty eradication→to eradicate poverty）ことに基づき、基礎語・修飾要素の関係を考えることができる。

poverty eradication 貧困の撲滅
employment creation 雇用の創出

3．4　名詞1＋名詞2　→　見出し語＝複合語

タイプ3.4は、「名詞＋名詞」という構造では共通しているが、3.3とは異なり、構成要素の意味内容が「目的語相当の名詞＋他動詞の名詞化」とは分析できない、より一般的な「名詞＋名詞」構成である。これらは、3.3とは区別し、複合語として扱うことが実際的であると思われる。

development priorities 開発プライオリティー
employment opportunities 雇用機会
health care ヘルスケア
previous *world conferences* concerned with questions closely related to the different aspects of social development 社会開発のさまざまな側面に密接に関連した問題に関する先立つ世界会議

ついでに述べておくならば、以下の Programme of Action も、同様に複合語として扱うことが適当であると思われる。

the issues mentioned in the present *Programme of Action* 本行動計画に言及されている多くの事項

3．5　形容詞＋名詞　→ 見出し語＝名詞

タイプ 3.5 の諸例は、「形容詞＋名詞」の結合である。基礎語・修飾要素の区別に従えば、名詞が基礎語であり、形容詞が修飾要素である。このタイプには、前節の「名詞＋名詞」タイプと同様に、すでに複合語として扱う方が適切、ないし実際的であると思われる例が多数含まれている。

all the recommended *actions* 勧告されるすべての行動
its integrated *approach* その総合的アプローチ
cultural *backgrounds* 文化的背景
relevant international *conferences* 関連の国際会議
social *development* 社会開発
sustainable *development* 持続可能な開発
good *education* 良質な教育
a sound economic *environment* 健全な経済的環境
fundamental *freedoms* 基本的自由
the common *good* 共通の善
sustained economic *growth* 持続的な経済成長
social *integration* 社会的統合
national *laws* 国内法
their ability to participate in social, cultural, economic and political *life* 彼らが社会的、文化的、経済的及び政治的生活に参加する能力
social *objectives* 社会目的
environmental, economic and social *policies* 環境、経済及び社会の各政策
human *rights* 人権
the sovereign *right* of each country 各国の主権
public *services* 公共サービス
civil *society* 市民社会
coherent national and international *strategies* for social development

the various religious and ethical *values* さまざまな宗教的、倫理的価値観

3．6　名詞１＋前置詞 of＋名詞２（主語など）　→ 見出し語＝名詞１

タイプ 3.6 は、タイプ 3.2 と同じく「名詞＋of＋名詞」という構造を持っているが、構成要素の意味内容が異なり、名詞２が名詞１によって表示された「行為、産物、備わった能力など」の「主体、所有者」を表している例である。このタイプでは、名詞２の、上述の意味でのポテンシャル（2.3 節）が大きいことが特徴である。したがって、このタイプでは、名詞１を基礎語とし、見出し語に立てることが適当であると考えられる。

the various religious and ethical values and cultural *backgrounds* of its people 人々のさまざまな宗教的、倫理的価値観及び文化的背景
the *capacity* of people 人々の能力
the *commitments, principles and recommendations* of these other conferences これらの他の会議のコミットメント、原則及び勧告
the *dignity* of each individual 個々の尊厳
the *experience* of many countries in promoting social objectives in the context of their particular conditions 多くの国々のそれぞれの特別な状況のコンテキストにおいて社会目的を促進する上での経験
the *outcomes* of relevant international conferences 関連の国際会議の成果
the *participation* of all concerned すべての関係者の参加
the sovereign *right* of each country 各国の主権
the *well-being* of people 人々の幸福

上述のような取り扱いを支持する根拠の一つは、バリエーションとして、以下のような例が見られることである。3.6 の基本例では具体的な名詞として表現された「主体、所有者」（＝名詞２）が、以下の例では代名詞化されている。この their は、いずれも、of all the recommended actions とパラフレーズすることが可能である。

All the recommended actions are linked, either in the requirements for *their design*, including the participation of all concerned, or in *their consequences* for the various facets of the human condition.ここに勧告されるすべての行動は、すべての関係者の参加を含む企画段階における必要条件あるいは人間の置かれる状況のさまざまな局面に対する影響において、相互に関連している。

3．7　名詞１＋前置詞 of＋名詞２　→ 見出し語＝名詞２

タイプ 3.7 は、タイプ 3.6 と同じ「名詞＋of＋名詞」構造であるが、これとは逆に、名

詞１のポテンシャル（2.3 節）の方が名詞２のそれよりも相対的に大きく、このため後者を見出し語として立てるほうが合理的であると考えられる例である。

the various facets of the *human condition*
in the context of *their particular conditions* それぞれの特別な状況のコンテキストにおいて
against the background of *these other conferences* これらの他の会議を背景として
all aspects of *social development and all policies* 社会開発とすべての政策のあらゆる側面
the different aspects of *social development* 社会開発のさまざまな側面
the special importance of the *Programme of Action* lies in its integrated approach and its attempt to combine many different actions この行動計画の特別な重要性は、その総合的アプローチと多くの異なる行動を結びつけようとする試みにある

３．８　名詞１＋前置詞＋名詞２　→ 名詞２

タイプ 3.8 は、タイプ 3.7 と同じ「名詞＋前置詞＋名詞」構造であるが、前置詞として of 以外が使われている例である。タイプ 3.7 と同じく、名詞１のポテンシャルのほうが名詞２のそれよりも相対的に大きく、このため後者を見出し語として立てるほうが合理的であると考えられる。

in accordance with *its evolving capacities* その発展能力に応じて
relations within *communities* コミュニティー内の関係
their consequences for *the various facets of the human condition* 人間の置かれる状況のさまざまな局面に対する影響
requirements for *their design* 企画段階における必要条件
to live together with full respect for *the dignity of each individual, the common good, pluralism and diversity, non-violence and solidarity* 個々の尊厳、共通の善、多元主義・多様性、非暴力、連帯を十分に尊重し、共に生活する
relationship among *groups and nations* グループと国家間の関係
interaction between *policies* 各政策間の相互の関係
to combine many different actions for *poverty eradication, employment creation and social integration* 貧困の撲滅、雇用の創出及び社会的統合のための多くの異なる行動を結びつける
in conformity with *all human rights and fundamental freedoms* すべての

人権と基本的自由を遵守して
with full respect for *the various religious and ethical values and cultural backgrounds of its people* 人々のさまざまな宗教的、倫理的価値観及び文化的背景を十分に尊重して

次の例は、名詞1の代わりに形容詞 essential が登場している例であるが、同様に考えてよいと思われる。

to be essential for *success* in the longer term 長期にわたる成功のために必要である

3．9　名詞＋修飾句（to 不定詞句など）　→ 見出し語＝名詞

タイプ 3.9 は、修飾要素が to 不定詞句や形容詞句になっている場合である。

their *ability* to participate in social, cultural, economic and political life 彼らが社会的、文化的、経済的及び政治的生活に参加する能力
its *attempt* to combine many different actions for poverty eradication, employment creation and social integration in coherent national and international strategies for social development 貧困の撲滅、雇用の創出及び社会的統合のための多くの異なる行動を社会開発に関する一貫した国内及び国際戦略において結びつけようとする試み
the *capacity* of people to live together with full respect for the dignity of each individual, the common good, pluralism and diversity, non-violence and solidarity 人々が、個々の尊厳、共通の善、多元主義・多様性、非暴力、連帯を十分に尊重し、共に生活する能力
previous world *conferences* concerned with questions closely related to the different aspects of social development 社会開発のさまざまな側面に密接に関連した問題に関する先立つ世界会議
cultures based on freedom and responsibility 自由と責任を基礎とする文化
to create a national and international *environment* favourable to social development 社会開発に好ましい国内的、国際的環境を醸成する
the *issues* mentioned in the present Programme of Action 本行動計画に言及されている多くの事項
measures to eliminate discrimination and promote participation and harmonious social relationships among groups and nations 差別を撤廃し、参加及びグループと国家間の調和ある社会関係の促進のための手段

policies to eradicate poverty, reduce disparities and combat social exclusion 貧困を撲滅し、不均衡を減少させ、社会からの疎外を防ぐための政策
questions closely related to the different aspects of social development 社会開発のさまざまな側面に密接に関連した問題
the *right* to differ, to create and to innovate 異なることへの権利及び創造し革新する権利

4．おわりに

本稿では、ある特定分野のテキストをもとにして、その分野の用語用例辞典を作成する手順、特に見出し語として立てるべき語の抽出方法について、具体的に考察をしてきた。実際には、この見出し語の立て方と並んで、用例として採録すべき句（名詞句、動詞句）の適切な長さ（範囲）についても考えるべき点は多い。語はいずれも、適切なコンテキストが与えられて初めて生きるのであり、用語用例辞典を編纂するに当たっては、実際の生きた用例を殺さずに採録することが求められる。そのためには、理論的考察より、むしろ実践での経験が重要であろうと思われる。この意味で、今後、具体的作業をさらに地道に進めていくことが必要である。

註

本稿の用例に付けられた和訳は、基本的に国際連合広報センターから刊行された日本語訳（1998年1月）に基づいている。用例の一部分だけを取り出した場合などには、部分的に変更を加えた場合がある。

参考文献

Hausmann, Franz Josef: Kollokationen im deutschen Wörterbuch. Ein Beitrag zur Theorie des lexikographischen Beispiels. In: Lexikographie und Grammatik. Akten des Essener Kolloquiums zur Grammatik im Wörterbuch 28.-30.6.1984. Tübingen, 1985.